様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月６日現在

機関番号：２４３０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520381
研究課題名（和文）　「四大奇書」の研究
研究課題名（英文）　The Study of “The Four Great Novels”
研究代表者
小松　　謙（KOMATSU KEN）
京都府立大学・文学部・教授
研究者番号：００１９５８４３

研究成果の概要（和文）：「四大奇書」を総体として研究する書籍『「四大奇書」の研究』を刊行して、各作品の成立事情や社会との関わりを明らかにし、文学・出版史の中に位置づけた。また、「四大奇書」と同じ題材を扱う演劇についての論文を三篇発表し、両者の関係を明らかにするとともに、小説の成立過程についても新たな方向から考察した。あわせて、古典演劇に関する共著（約三分の二を執筆）の書籍一部と論文一篇を発表した。

研究成果の概要（英文）：I Published “The Study of ‘The Four Great Novels’”, the book which studied ″The Four Great Novels″ as the entirety, and clarified the relation with establishment circumstances and the society of each work, and placed it in history of Chinese literature and publication. In addition, I wrote the three articles about the drama which treat the subject same as “The Four Great Novels”, and clarified the relations of the drama and the novel, on the other hand, considered the process of the formation of the novels from a new course. In addition, I wrote an article and the part of the book of the joint work (wrote approximately two-thirds) about the classical drama.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	600,000	180,000	780,000
２０１０年度	400,000	120,000	520,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学　各国文学・文学論
キーワード：四大奇書・水滸伝・三国志演義・西遊記・金瓶梅・演劇・版本

１．研究開始当初の背景

「四大奇書」として知られる『水滸伝』『三国志演義』『西遊記』『金瓶梅』については、中国文学における最も重要な作品として個別の研究はなされていたが、四篇を総体として研究した例はなかった。しかし、四篇はそれぞれ全く異なった性格を持っており、そこには中国小説に関する多様な問題が集約されているに違いないという点から考えれば、四篇を総体として研究することにより、白話小説に関わるさまざまな問題点、具体的には白話小説はどのようにして生まれ、成長したのか、またその制作者・読者はどのような人々であり、社会においていかなる位置を占めていたのか、演劇との関わりはどのようなものであったか等の諸点

について解明することが可能になるものと期待される状況であった。
当時研究代表者は、『西遊記』を除く「四大奇書」の各作品と、それらと密接な関連を持つ元明演劇、それらの背景をなす明代知識人に関する研究を重ね、多数の業績を発表しており、四篇を総体として研究するにふさわしい状況にあった。

２．研究の目的

それぞれ異なる性格を持つ四篇を総体として研究することにより、白話小説はどのようにして生まれ、成長したのか、またその制作者・読者はどのような人々であり、社会においていかなる位置を占めていたのか、演劇との関わりはどのようなものであったか等の問題を解明することにより、白話小説いうジャンルの発展過程を立体的に解明するとともに、白話小説という窓を通して当時の社会を多面的に把握し、最終的には白話小説というジャンル、ひいては白話文学全体について一定の見取り図を提供するとともに、小説に関わったであろう歴史の表面には現れにくい人々の行動や思想を探り、明代後期という極めて重要な変動期における社会の姿を多面的に把握する。

３．研究の方法

「四大奇書」それぞれについて、テキストの関係・性格について考察し、出版物の性格を踏まえつつ再度継承関係を見直すことにより、それぞれのテキストが、どのような契機で、どのようにして作り出されたか、またどのような読者を想定していたかを明らかにする。あわせて、語彙やテクニカルタームの分布を通して、客観的に成立事情を解明することを試みる。

これらの作業を通じて、各小説の成立過程を可能な限り明らかにするとともに、刊行の事情や内容の変質について考察することにより、小説と当時の社会の関係を明らかにする。更に、「四大奇書」と関わる戯曲について研究を進め、「四大奇書」成立過程解明の一助にするとともに、演劇と「四大奇書」の関わりをも可能な限り明らかにし、あわせて「四大奇書」の物語が民間でどのように変容していったかについても考察する。

最終的には、白話小説全体の中において「四大奇書」それぞれが占める位置について多面的な考察を加えるとともに、中国小説史の展開を再検討し、小説という枠に縛られない「白話文学」という大きな枠組みの中において「四大奇書」を多面的に描くとともに、「四大奇書」を通して中国社会の構造とその変遷を描き出すことを目指す。

４．研究成果

(1)「四大奇書」を総体として把握し、その成立と展開を通して当時の社会を多面的に理解することをめざした書籍『「四大奇書」の研究』を、平成２２年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号２２５０５０の助成を得て、汲古書院から刊行した。

同書は四部からなる。第一部「明代に何が起こったのか」（書き下ろし）においては、出版量が爆発的に増加する万暦年間に至るまでの出版史と社会の状況を概観し、白話文学作品が刊行されるに至る社会の状況について、出版社と読者の両面から時代を追って考察を加えることにより、「四大奇書」が刊行されるに至った社会的要因を明らかにした。

第二部『三国志演義』においては、第一章「「三国」について」（書き下ろし）で三国期が芸能の題材として特に重要な時代となった理由について考察し、続く第二章「三国志物語の変容」において三国志の物語がどのような変化を遂げていったかについて出版や社会との関わりから論じた上で、第三章「『三国志演義』の成立と展開」において、嘉靖本と葉逢春本という二つのテキストの異同から、具体的に『三国志演義』という小説の成立過程を一定程度復元する作業を行った。

続く第三部『水滸伝』においては、第一章「『水滸伝』成立考―内容面からのアプローチ」と第二章「『水滸伝』成立考―語彙とテクニカルタームからのアプローチ」において、内容・語彙の両面から『水滸伝』成立の過程をある程度復元した後、第三章「『水滸伝』はなぜ刊行されたのか」（書き下ろし）において、明らかに反体制的性格を強く持つこの書物がなぜ刊行され、知識階級に受け入れられたのかについて、当時の社会や思想の状況と絡めて論じた。

第四部「『西遊記』と『金瓶梅』」においては、第一章「『西遊記』成立考」（書き下ろし）において、テクニカルタームの分布を手がかりに『西遊記』の成立過程をある程度復元し、第二章

「『金瓶梅』成立と流布の背景」において、『金瓶梅』の成立に当時の秘密警察であった錦衣衛が深く関わっていることを明らかにし、この小説が武官の生活を題材とし、武官を主たる読者の一つとして成立したものであろうことを論じ、主たる読者の一つとして武官が想定されていることは、『金瓶梅』に限らず、白話文学全般に共通し、それが白話文学の性格を規定する一要因となっていることを指摘し、「四大奇書」全般にわたる問題を提示した。

本書の本文３３６ページのうち１２０ページ以上は今回の研究を開始してから執筆した書き下ろしであり、従来行ってきた研究を発展させ、新たな要素を付け加えて、「四大奇書」それぞれの成立・展開の事情を社会との関わりにおいて論じ、最終的には白話文学の特質と成立刊行の過程を総体的に明らかにするとともに、「四大奇書」から当時の社会の状況と文化的特質をあぶりだしたものである。

本書の刊行によって、演劇との関わりという点を除いて、おおむね本研究の目的は達成されたといってよい。

本書は、日本において初めて「四大奇書」をまとめて扱った書籍として、国内はもとより、国外においても反響を呼んだ。

（２）上記の書籍の刊行により、三年計画の二年目においてすでに当初の目標は基本的に達成された状況ではあったが、更に踏み込んだ研究を行い、『水滸伝』成立について新たな論文「梁山泊物語の成立について―『水滸伝』成立前史―」を『中国文学報』に発表した。

同論文は、元雑劇における梁山泊ものの内容が『水滸伝』とはほとんど重ならないという事実から出発して、中国が金と南宋に分裂していた時期において、両国でそれぞれに梁山泊物語が発展し、金のものは元雑劇、南宋のものは『水滸伝』へと発展し、明代に入ってから元雑劇の一部のみが『水滸伝』に取り込まれたという新しい説を提起したものであり、従来になかった見解を示したものとして大きな反響を呼んだ。本論文の内容は、今後『水滸伝』研究を全く新しい方向へと発展させる契機となりうるものである。

（３）『「四大奇書」の研究』では唯一不十分であった演劇との関係に関する研究は、当初は三年目に実施する予定であったが、予想より早く研究が進展したため、一年目の途中からこの研究を進めることとし、『水滸伝』と演劇の関係を扱った論文として「水滸雑劇の世界―『水滸伝』成立以前の梁山泊物語」を『アジア遊学　『水滸伝』の衝撃　東アジアにおける言語接触と文化受容』に発表した。

同論文は、梁山泊物語を題材とする元雑劇について、『水滸伝』とは全く異なる内容を持つことを論じた上で、その特徴について分析を加えたもので、特に和漢比較文学関係者の間で好評を博した。

二年目に『「四大奇書」の研究』が刊行されて以降は、演劇との関係に関する研究を中心にすえることとして、まず『水滸伝』と共通する題材を扱う演劇に関する研究を進め、論文「『宝剣記』と『水滸伝』―林冲物語の成立について」を『京都府立大学学術報告』に発表した。

同論文は、従来『水滸伝』の影響下に成立したものと考えられてきた戯曲『宝剣記』について再検討を加え、作者とされる李開先は先行する作品を改編したものであることを指摘し、従来全く不明とされてきた原型の作者を特定し、その成立時期が大幅に早まる可能性を指摘した上で、『水滸伝』の林冲物語の特異性を論じ、この部分が『宝剣記』に依拠している可能性を示したもので、『水滸伝』成立に関わる大胆な新説として反響を呼んだ。

（４）更に、やはり演劇と「四大奇書」の関係に関する研究の一環として、三国志を題材とする清朝宮廷演劇のテキストに関する研究「清朝宮廷大戯『鼎峙春秋』について―清朝宮廷における三国志劇―」を『中国文学報』に発表した。

本論文は、『鼎峙春秋』の内容を徹底的に分析するとともに、その素材となった先行作品を明らかにし、清朝宮廷演劇がどのような劇種を使用していたか、その制作手法はどのようなものであったか、依拠した『三国志演義』のテキストはどのようなものであったか等を解明すると同時に、本筋である劉備の物語が終わった後、他の物語は無視して諸葛亮の南蛮征討と曹操の地獄巡りのみが延々と演じられることを鍵に、政治的パフォーマンスとしての清朝宮廷演劇の性格について新しい考えを示すとともに、素材となった演劇作

品に関する考察を通して、今は失われた各種の三国志劇の内容や『三国志演義』成立過程についても新たな見方を示し、演劇・小説・歴史の各方面の研究者間で反響を呼んだ。

あわせて、「四大奇書」と並ぶ小説『平妖伝』と清朝宮廷演劇の関係について考察した「清朝宮廷大戯『如意宝冊』について」を『和漢語文研究』に発表し、清朝宮廷演劇の特質や、小説及び先行演劇作品との関係について考察を深めた。これらは、今後の演劇と小説の関係、更には清朝宮廷演劇の意義等の問題についてのより全面的な考察へと発展しうるものである。

（５）演劇と小説の関係に関する研究を進める前提として、演劇テキストとはそもそもどのようなものであったかを明らかにするとともに、本研究において扱っている明・清の演劇作品に大きな影響を与えた元雑劇について研究を進めるため、中国最古の戯曲刊本である『元刊雑劇三十種』について徹底的な校勘と注釈作業を行った上で、全文の日本語訳を作成し、あわせて本格論文に匹敵する解説を付した書籍『元刊雑劇の研究二　貶夜郎・介子推』を刊行した。

同書は他の九名との共著ではあるが、全体の三分の二にあたる「貶夜郎」の解説及び本文の校記・注釈・訳文は、すべて研究代表者の単独執筆である。

（６）演劇と「四大奇書」の関係に関する研究を更に進め、その内容を古典小説研究会関西例会において、「演劇と小説の関係について」と題して発表した。

この発表は、演劇と小説の関係について概観し、両者の関係のパターンについて、演劇との関係が比較的希薄な『金瓶梅』を除く「四大奇書」を例にして論じた上で、特に『三国志演義』と演劇の関わりについて具体的に論じ、演劇テキストの内容から『三国志演義』の問題点を解明することができることを論じたものであり、大きな反響を呼んだ。

この発表の内容はすでに論文としてまとめられており、平成２４年度中に発表の予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
小松　謙、「清朝宮廷大戯『鼎峙春秋』について―清朝宮廷における三国志劇―」、『中国文学報』、査読有、８１、２０１１、Ｐ５８－１２９
小松　謙、「清朝宮廷大戯『如意宝冊』について」、『和漢語文研究』、査読有、２０１１、Ｐ１０４－１３０
小松　謙、「『宝剣記』と『水滸伝』―林冲物語の成立について」、『京都府立大学学術報告』、査読無、６５，２０１１、Ｐ１－１６
小松　謙、「梁山泊物語の成立について―『水滸伝』成立前史―」、『中国文学報』、査読有、７９、２０１１、Ｐ２５－４９
小松　謙、「水滸雑劇の世界―『水滸伝』成立以前の梁山泊物語」、『アジア遊学　『水滸伝』の衝撃　東アジアにおける言語接触と文化受容』、査読無、１３１、２０１０、Ｐ２５－３４

〔学会発表〕（計１件）
小松　謙、「演劇と小説の関係について」、古典小説研究会関西例会、2012年2月11日、キャンパスプラザ京都

〔図書〕（計２件）
赤松紀彦、金文京、小松　謙、佐藤晴彦、荀春生、高橋繁樹、高橋文治、竹内誠、土屋育子、松浦恆雄、汲古書院、『元刊雑劇の研究二　貶夜郎・介子推』、2011、P5-41及びP61－185
小松　謙、汲古書院、『「四大奇書」の研究』、2010、336ページ

６．研究組織
(1)研究代表者
小松　謙（Komatsu Ken）
京都府立大学文学部・教授
研究者番号：００１９５８４３

(2)研究分担者
無し

(3)連携研究者
無し